

氏名（本籍）	楊 鶴
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博 甲 第 9764 号
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	フランス語の罵倒表現に関する言語学的研究

主	査	筑波大学 教授	DL（言語学）	青木 三郎
副	査	筑波大学 教授	博士（言語学）	沼田 善子
副	査	筑波大学 教授	DL（文学）	増尾 弘美
副	査	筑波大学 准教授	DL（文学）	小川 美登里

論文の要旨

本論文は、まず現代フランス語における罵倒表現の種類を分類し、その上で実際に使用頻度の高い罵倒表現に焦点を当て、その表現が持つ意味の特徴と発話機能を考察するものである。フランス語は罵倒表現が豊富であることが知られているが、従来個別の罵倒表現は辞書的記述にとどまり、その言語機能を分析した研究は極めて少ない。本論文は先行研究の批判的検討を通じて、言語機能の視点に立った罵倒表現の分類を提案し、個別の表現を分析していくことで、罵倒表現の意味的多様性と言語機能の一般性を論じている。

本論文は、以下のとおり、序章と結論及び本論6章から構成される。

序章

- 第1章 フランス語における罵倒表現の多様性
- 第2章 フランス語の罵倒表現の形式とタイプ
- 第3章 フランス語の「罵倒」を表す語彙の表現類型
- 第4章 話し言葉における *merde* の意味機能
- 第5章 話し言葉における *putain* の意味機能
- 第6章 罵倒表現 « *Espèce de N!* » の意味機能

結論

序章では、罵倒表現を研究課題とする必要性和動機が述べられ、本論文全体の構成と各章での展開が総括的に論じられる。罵倒表現に関する従来の研究を概観し、多くの場合、罵倒表現の使用に関して文化的・語彙的・辞書編纂的な説明にとどまっていることを批判し、言語学的視点から分析を行うことによって、新たな分類が可能であることが主張される。

第1章では、フランスで最も有名な Edouard (1967) *Dictionnaire des injures* (『罵倒表現辞書』) を参照し、フランス語の罵倒表現が非常に豊かであり、多種多様な語彙、語句、慣用表現が用いられていることを確認する。Edouard (1967) にとって罵倒とは相手を不快にさせ、貶める表現であり、その多様な表現は、「人類」、「自然」、「社会」、「風習・公衆道徳」のいずれかを言及したものとして分類されている。しかしこの記述・分類は、罵倒表現の分類というよりも、罵倒表現を通じて明らかとなる文化的価値の分類であり、それが辞書に

記述されているのであって、どのような場面でどのように発話され、どのような効果をもたらすのかという発話機能は全く扱われていないことが批判的に検討されている。

第2章では、Edouard (1967) 以降フランス語の罵倒表現を扱った主な先行研究をとりあげ、そこで論じられる罵倒のタイプが検討される。それにより1970年代以降は、罵倒のタイプには *injurer* (罵倒) と *juron* (ののしり) を区別するべきであるという主張が主流となることを論じている (Guiraud (1976)、Larguèche (1983)、Rouayrenc (1998) など)。さらに *insulte* (侮辱) と *blasphème* (冒瀆) を区別するという提案 (Lagorgette (1993, 2003, 2006)) を検討し、フランス語の罵倒表現を進めるためには、*injurer* (罵倒)、*insulte* (侮辱)、*juron* (ののしり)、*blasphème* (冒瀆) の4つのタイプを区別する点が重要であることが主張される。

第3章では、第2章の先行研究により明らかになった4つの罵倒タイプを2つに大別することが提案される。すなわち *injurer* (罵倒) / *insulte* (侮辱) タイプと *juron* (ののしり) / *blasphème* (冒瀆) タイプに2分し、さらに *gros mots* (下品な言葉) を加えることで、フランス語の罵倒表現の分類全体像を提案する。*injurer* (罵倒) / *insulte* (侮辱) タイプは「聞き手に向かって発話される」という点で共通しているが、*injurer* (罵倒) が下品で卑劣な表現が用いられていることが多く、聞き手を非難する発話行為であるのに対し、*insulte* (侮辱) は、聞き手の尊厳や名誉に対する侵害であり、聞き手のマイナス的特徴に言及することで、聞き手を心理的に追い詰める発話行為であることが論じられる。それに対して、*juron* (ののしり) / *blasphème* (冒瀆) は聞き手に向けられた発話ではなく、「事態に対する反応を表す間投詞」として捉えられ、話し手の心情を反映する表現として理解される。*gros mots* (下品な語) は良俗に反する語彙 (糞尿表現、性的表現など) が含まれ、話し手の社会的イメージを決定する言語位相の問題であると理解され、4つのタイプを包括するものと捉えることができる。こうして罵倒表現の5類型間の関係が明らかとなる。

第4章から第6章は、以上の罵倒表現の分類と発話構造を踏まえた上で、具体的な罵倒表現が分析される。第4章では、語彙的には「糞」を意味する名詞であり、発話場面では「くそ!」という間投詞として捉えられる *merde* (くそ) を取り上げ分析が行われる。事例の観察を通じて、1)「本来実現を望んでいた事態が実現しなかった場合」と2)「回避すべき事態を回避できず、実現してしまった場合」の2つの発話パターンに分類され、いずれの場合においても、*merde* が表すのは、話し手が「望んでいなかった事態に陥る」ということであることが明らかにされる。

第5章では、*putain* (ちくしょう) が取り上げられる。*putain* は「売春婦」の意であるが、会話では間投詞として、話し手が直面する事態に対して、まともに受け止めることができず、通常判断基準に比較して、無法、法外等の事態認識を示すものであることが論じられる。さらに、*putain* と *merde* が交換可能な用例を観察し、両表現の相違を明確にするための考察を展開することで、改めて基本的意味が両者の交換可能性に関わっていることが明らかとなる。

第6章では、「*Espèce de N!*」タイプの罵倒表現を取り上げ、その意味機能を考察し、*espèce de* が前置することによって、Nの特異性が強調され、より強い罵倒効果をもたらす仕組みが明らかにされる。また「*Espèce de N!*」は聞き手に向かって発話される *injurer* (罵倒) として捉えられ、*espèce de* はNを強調し、Nに含まれている特異な特性が強調され、より強い罵倒表現となることが明らかになる。

結論では、本論文全体が総括され、従来論じられてこなかった言語による罵倒行為に関する理解に貢献し、新たな研究可能性を開いたことが示されている。同時に、他言語間の対照研究等、罵倒表現を軸とした言語研究の今後の展望が示される。

審査の要旨

1 批評

本論文は、フランス語の多様な罵倒表現を取り上げ、その言語的機能の特徴に注目することで、語彙的意味と罵倒機能の間の関連を明らかにした意欲的な研究である。語彙のもつ基本的意味、話し手、聞き手、直面する発話場面の事態を4つの基準として罵倒表現の類型を提案し、聞き手志向の罵倒表現と、事態に反応する罵倒表現に大別する。さらに聞き手志向の罵倒表現では、聞き手を非難・批判する「罵倒」と、聞き手の特徴をあげつらい、相手の品格を貶める「侮辱」とを入念に区別する。事態に対しても不都合な事態の実現に対する「ののしり」と、不都合な事態を生じさせた神のような人知を超えた力に対する「冒瀆」を区別する。この2種4類の分類の上に、さらに「下品な言葉」を置き、言葉遣いの位相として位置付ける。本論文の最も重要な貢献は、このように罵倒表現を2種4類に類型化することで、罵倒表現の体系的な記述が可能になることを提案した点にある。

さらに本論文の優れた点として、まず、個々の罵倒表現の入念な実例観察と体系的な記述が挙げられる。罵倒表現の表現効果を考察するために、本論文は具体的な文脈の精緻な観察により、微妙なニュアンスを明らかにし、文脈的要因と表現自体のもつ意味的機能の体系的な記述を試みている。merdeの指示的意味は「糞」であるが、意味的機能は「関わることを望まない価値」を作ることであり、そこから主体（話し手）は「回避したい」理念的事態と「回避できない」現実の齟齬に対して、感情的な「ののしり」という反応を起こすという独自の説明が行われる。また同様の方法でputain（売春婦）を記述し、putainは事態に対して「関わることのできない価値」という意味機能をもつという仮説を立てる。それにより現実の事態に対する話し手の「拒否、拒絶、煩悶」、さらには「予想外の驚き」といった価値判断に対する説明が可能となる。このようにフランス語ではmerdeとputainはともに「ののしり」として類義的に用いられるが、事態に対する価値の捉え方が根本的に異なるため、putainが使用可能な文脈においてmerdeが使用不可能であるといった文脈の存在が明らかとなる。またespèce de N（～みたいな奴）という聞き手に対する侮辱表現では、espèce（種）とsorte（種類）とを比較し、なぜsorteは分類しか表さず、espèceは相手の振る舞い、風貌などに対して侮辱表現となりうるのかを考察する。この問題を論じた先行研究は皆無といってよく、本論文の独自性が光っている。また本論文は、日本語に適確に対応する翻訳ができない独特な俗語的表現が多いにも関わらず、微妙なニュアンスを伝える翻訳に成功していることも特記しておきたい。

以上、本論文はフランス語の罵倒表現について分類の全体像を示し、個別の表現に関して詳細な記述を行っており、本格的な罵倒表現研究に道を開いた点において高く評価することができるものである。

ただし、本論文は多様な罵倒表現の一部の記述にとどまっていることは否めない。他の罵倒表現との比較をするなどして、原理的な説明ができるようにさらなる考察が必要である。しかしながら、この点は今後の研究を深めることによって解決できるものであり、本論文の価値を損なうものではない。

2 最終試験

令和3年1月14日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。